

百尺竿頭、一步を進むべし

上廣榮治

本部旗支部旗の堂々の入場、橋本總理はじめ錚々たる来賓の方々の熱い思いに溢れたご挨拶、音と光で演出された人間讃歌、万余の会友の歓喜に満ちた顔、顔、顔……大成功裡に幕を閉じた創立五十周年記念式典の興奮未だ覚めやらぬ日々であります。それもこれも、偏に会友各位のたゆまざる精進と努力の成果であることは改めて申し上げるまでもありません。しかし、だからこそ、敢えて辛口の言を呈することが会長の責務と心得、以下、論を進めてまいりたいと思います。

ご承知のように、五十年前、あの人類が経験した最も悲惨な状況、広島の廃墟の中から、先師は日本再生への情熱と勇気を奮つて、「倫理立國」を提唱いたしました。以来、明日への展望もなく、その日の食にも事欠く混乱した社会の中で、また金錢のみを追い求め、飽食に奢る社会にあっても、実踐倫理宏正会は十年先、五十年先、百年先の明日を見据えた倫理実踐の正道を歩み続けてまいりました。

しかしつの世も、正しい道は容易に受け入れられることはありません。人は常に、目先の不安や欲望に支配されやすいものだからです。にもかかわらず、志を同じくする会友たちの文字通り寝食を忘れた献身的な努力によつて、私たちは荒廃した世相の中に倫理の灯火を掲げ続けてまいりました。そして、私たちの同志は次々と増え続け、今や支部の数二百六十九、会場まで含めるとその数七百数十にも上る勢いで

す。私たちにとってのこの五十年は、誠に実り多き五十年であつたと思います。しかし、そう評価したうえで、敢えて私は五十周年の節づけとして次の言葉をみなさんに贈りたいと思います。「百尺竿頭ひやくせきかんとう、一步を進むべし」と。

これは、もともと中国唐代の禅僧、長沙景岑ちょうさきげいしんの言葉です。「百尺竿頭ひやくせきかんとう」とは百尺もある竿の先のことですから、そこにある人は当然ながら他の人々よりもずっと傑出した人、高みにいる人です。彼は人として最も高いところにいるといつてもよいかもしません。

ところが、なお「百尺竿頭に坐する人、然しかも得入とくにゅうすと雖いえども未だ真となさず」というのです。他人をはるかに絶して傑出した人、最も高いところにいて、しかも「得入とくにゅうしている」つまり悟りを得た人であるとしても、彼を「真となさず」、彼を本物だというわけにはいかない。まだまだなのだ、というのです。そして、「須すべからく一歩を進むべし」、百尺の竿の先から、もつと高みに向かつて歩を進めなければならないぞ、と教えるのです。

実のところ、この言葉の真意は「まだまだ」どころではないのです。禅家では、悟つたといって安心している人、高みに達したといって人を見下す人、これらを「野狐禪やこぜん」といって、ひどく軽蔑さえするのです。悟りに安住した瞬間に、もう悟りの境地から、ただの凡俗に墮おちちてしまつてゐるからです。

然しかり、実踐倫理宏正会も過去五十年にわたる必死の努力で、今やあるいは百尺竿頭にいるのかもしれません。倫理の大道において私たちの前を歩む人々は、今現在においてはいないのであつたり、今は、他の人々よりも高みにいるからといって安心してはならぬい、この一事が大切なことです。今、この瞬間から、更なる高みに向かつて歩を踏み出すこと、それこそが大切なのです。

五十周年という大節にあたり、過去の努力を評価し先人の偉業を讃えることは大切なことでしよう。しかしそれが、よくやつた、立派だったと仲間褒めほめをすることであつたり、今に満足し、安心し、慢心する

ことであつてはならないと、逆に自戒すべき時なのです。

実践倫理宏正会は五十年を迎えたからめでたいのではありません。ただ五十年ということだけならば、それは単なる一つの通過点に過ぎません。もしも祝うべきことがあるとすれば、五十年の長きにわたって、常に竿頭から、より高みを目指して次の一步を踏み出し続けてきた、このたゆまぬ実践の態度そのものにこそあるのです。

先師が戦後の焼け跡に立ち敢えんと倫理立国を提唱した時、当時の日本人は誰もが、それどころではない、心の貧しさよりも物の貧しさだ、倫理などは迂遠な道だと笑つたはずです。しかし、今から振り返れば、先師は既にその時、百尺の竿頭に立つていたはずです。当時においても既に傑出した高みに達していたのです。しかし、先師が真に傑出していたのはその後の生きざまでした。先師は一瞬たりともその高みに留まることなく、日々飽くことなく、命を削つてまで歩を進めました。一度も振り返ることなく、安住することなく、もちろん後戻りすることも安易に墮することもなく、前へ前へと歩み続けました。

そして私たちも、立ち止まることを許されではおりません。何故なら、私たちは時の流れの中に生かされているからです。時間の経緯とともに移ろう生命を抱いて生きているからです。つい昨日まで「可」であったことが、今日はもう「不可」となる。そんなことは多々あります。人生のそうした機微を先師は深く悟っていたのです。だからこそ、日々新たなる決意をもつて生きることの大切さを強調する意味で、朝の誓五か条のそれぞれの冒頭に「今日一日」の言葉を付してあるのです。

人は今現在の幸福や成果に満足し、そこに安住したがります。ずっとこのままだつたらいいのにと、誰もがそんなことを思います。しかし、それは不可能な望みです。時は休みなく移ろい、状況は刻々と変化して、形ある物は変貌し、やがて滅びるのです。

私たち人間は、生きている限り、その一瞬の心境に留まることはできないのです。留まりたいと思つても、時間は容赦なく経過してしまいます。ある境地に留まるためには、その後の変化に目をつむり耳を閉

ざすしかありません。ちょうどビデオを一時停止の状態にしておくように、その後の人生を止めてしまふしかないのです。

つまり、ある境地に満足している人や、その場所に留まつて喜び楽しみたいという人は、既に変化してしまつた「今」が、何も目に入らなくなつてしまつている人だといつてもよいでしょう。過去の心境に閉じ籠つて、「今」を見ようともしない過去の人なのです。これでは、なまじ一時悟つたばかりに、それから後の人生は死んだも同然ということになります。

私たちはいつも「今」という移ろう時間の淵に立っています。それはちょうど百尺の竿の先に片足で立つてゐるような状態です。今上げた足をどちらに向けて踏み出すのか、常時そうした判断を迫られているのです。極端に言えば、そうした瞬間の連続が人生というものでしょう。それがまた人生の面白さ、大きな可能性でもあります。

倫理実践の基本はまさに、この「今」の大切さを知ることにあります。今がかくあることに感謝する。だからこそ、新たな決意で百尺竿頭から次の一步を踏み出すことができるのです。常に明日を目指して歩を進め、今の満足に留まらないから慢心しない。過去を恨まないから人の悪を思いもしない。現実をあるがままに大肯定し、そこから未来へ向かう。「愛和」も「喜勵」も、人ととのよりよい明日の関係を目指す実践の教えです。常に前に向かつて、「今」を力の限り充実させる、それが実践倫理の真髓であります。

確かに私たちは五十周年を迎えた。それは誠に慶祝にたえません。しかし、五十周年目がきた瞬間に、もう次の時代が始まっているのだ、新しい「今」がやってきているのだ、ということを決して忘れてはなりません。五十年という竿の先に、更に高い一日を加えることこそが大切なのです。

常に前進を続けた実践倫理五十年の歩みを喜びつつも、更に新たなる決意をもつて、共に次なる一步を踏み出しましよう。そして再び、やがてくる六十周年、七十周年の節目を、常に前へ歩み続けたという充実感とともに迎えようではありませんか。